

第4回 多摩市自治推進委員会 要点記録

日 時：令和4年6月28日(火) 18:00～20:00

場 所：多摩市役所3階 特別会議室

出席委員：大杉覚委員、小山弘美委員、寺田美恵子委員、林久美子委員、
塩沢泰弘委員、丸茂嶺介委員（オンライン）

オブザーバー：合同会社 MichiLab 高野義裕代表

事務局：浦野副市長、田島市民自治推進担当部長、原島健幸まちづくり推進室長、
西村企画調整担当主査、長

傍聴者：0名

議事次第：配付資料「第4回 多摩市自治推進委員会 議事次第」のとおり

1 開会

委員長 第4回第八期多摩市自治推進委員会を開催する。

まず、事務局から資料の確認をお願いしたい。

事務局より、配布資料の確認を行った

委員長 次に、第3回委員会の要点録の原案について、修正はないか。

修正はないようなので、これで確定とする。

2 モデルエリアでの検討状況報告

委員長 次に「モデルエリアでの検討状況報告」に移る。前回以降のモデルエリアでの活動内容と今後の取組みについて、事務局から報告をお願いしたい。

事務局より、資料11に基づき報告

委員長 モデルエリアでの活動に参加された委員から、ご感想をいただきたい。

委員 今回のミニプロジェクトは、子どもたちに楽しんでもらうことを目的として実施した。そのため、競争の要素やゴミ袋に絵を描くことでゴミをたくさん入れると絵が見えるようになるなどのしかけを加えた。参加した子どもたちからは、次回はいつ開催するのか聞かれるなど、目的は達成できたように感じる。個人的には、事前の打ち合わせをLINEなどを利用することで、一度も会わず行えたこと、またピリカというゴミ拾いアプリに匿名で写真をあげることで、全国から38件「ありがとう」をもらい、取組みの成功を客観的に見る事もできた。やって終わりではないことを意識して、“ゴミゼロ”にちなんだ5・3・0の付く日に第2回を実行しようと、7月の日程で検討している。またゴミ拾いを行ったことで、子どもたち自身に主体性がでてきてゴミを拾う習慣がついたり、そのエリアのゴミが捨てられるポイントや共通点が見えてくるなど、ポイ捨てする人たちに直接呼びかけられるような取組みに必要性を感じた。

委員長 素晴らしい気づきを得られるような取組みであったことがわかる。今回の様々なしかけについては、ぜひ事務局側もフォローの上、見える化して持続的にしていってほしい。また環境分析や、ゴミを捨てる人の行動分析などについては、そういった分野に専門知識

を持つ大学と協力して調査してみることで、継続的で発展的な取組みになるのではないかと考えている。また活動の続け方として、豊川市のポジティブチケットも参考になる。

モデルエリアでの活動について、オブザーバーからもご報告いただきたい。

オブザーバー

諏訪中エリア、青陵中エリアについては、令和4年度の実施に向けた仕込みの時期だと考えている。青陵中エリアでは、8月6日に「多摩BOOKさんぽ」の開催を予定している。今回は、地元の方からの希望もあり、中止になってしまった夏祭りの要素を取り入れたイベントを考えている。本を選ぶ過程で、射的やヨーヨー釣りを組み合わせる形で、話題性も出していきたい。また10月2日に地域のスポーツイベント内で、防災倉庫を開けるというイベントを考えている。地域福祉推進委員会の世話人会で話した際、一緒に防災倉庫に入っているものを使用して、炊き出しをしてみたらどうか、というアイデアをもらった。また若者会議からは、ペットの防災についての講習会をその場で開くなど、防災を地域イベントに組み合わせる取組みを考えている。諏訪中エリアでは、ハロウィンイベントとして、こども110番の家を周りお菓子をもらう企画を考えている。アイデアは若者会議から出たものだが、企画段階で地域福祉推進委員会の世話人会で共有することで、親和性のあるイベントになるように意見をもらっている状況である。また12月に日本総合住生活（JS）が開催しているクリスマスイベントと障がい者美術作品展の組み合わせを、商店街というフィールドを使う話を進めている。全体的な話としては、以前から地域の人の得意な事をシェアリングできるようなアプリを作りたいと考えている。50周年の市民提案事業でも手をあげる等、実現に向けて動いている現状である。

委員長
オブザーバー

イベントの中で、お菓子を配るといった話があったが、費用はどこから捻出しているのか。今後は地域の中で捻出していきたいが、初めての取組みとして、現状はモデルエリアの中間支援委託の事業費から捻出している。

委員長

エリアミーティングのミニプロジェクトではどこから捻出したのか。

委員

参加者の中で、家にあるものを持ち寄った。ゴミ袋は、ボランティア袋を利用した。

委員長

豊川市では、事業者にも協力してもらっている。今後は、継続的に考えていくために、そういった工夫も考えいきたい。

委員

フードバンクに登録すると、お菓子の配布を受けることができる。それも1つの手段かもしれない。

委員

ミニプロジェクトを実施したことで、最後に集まったたくさんの方のゴミの処理方法に困った。事前に申請すれば、指定の場所にゴミを出せば後日持っていってもらえることが実践してみたことでわかった。

委員

実施してみたことで出てきた反省点・気づきは大切である。またそういった部分は、行政側からの情報提供も必要かもしれない。

副委員長

「多摩BOOKさんぽ」について、どんなイベントなのか教えてほしい。

オブザーバー

日本総合住生活（JS）と共催で開催している本をテーマにしたイベントである。イベントでは、八角堂という実質コミュニティセンターのような機能をもった施設で、本を1冊もつてくると会場にある本と交換できる「本の交換会」を実施している。わたしたちは、その隣にある豊ヶ丘南公園で、モバイル屋台図書館というビニールシートやテントなど公園で本を読む際に使ってもらえる物を貸出していて、公園の新しい使い方を提案している。

昨年だけで 3 回実施しており、今回は新しい形として夏祭り要素を取り入れる方向で考えている。

委員長 多摩市にゆかりのある作家の本を置いたり、トークイベントをやってみるのも良いかもしれない。

3 意見交換

続いて、次第 3 の「検討・議論すべき方向性について意見交換」について、事務局より説明をお願いしたい。

事務局より、資料 12-1、参考資料 1、3 に基づき報告

委員長 前半 30 分ほど前回は振り返りつつ、テーマ 1 「エリア性の位置づけ」やテーマ 2 「無関心層の「掘り起こし」から自治の推進へ」を中心に、追加意見があればお願いしたい。

副委員長 前回の振り返りを改めて聞き、多角的な意見が出し合えたように思う。自分自身の研究領域から考えた際、自治会との関係が気になった。モデルエリアでの様々な取組みの中で、自治会との関係性は見えてきているのか知りたい。

オブザーバー 多摩市は、どちらかという自治会より管理組合のほうが多い印象を受けている。管理組合とはマイナスな関係性でもないが、特にこちらが企画した内容に対して乗り気になってくれる印象もない。モデルエリア内の自治会は、協力的な印象である一方、地域福祉推進委員会などに出席している自治会との交流が多く、そもそも直接的な関わりを持っていない自治会がある。また自治会については地域特性として、既存地域とニュータウン地域の違いもあり、ニュータウンへの入居者を受け入れていないような自治会も存在している。そのため、私自身テーマ 1 「エリア性の位置づけ」については、ある程度エリアによって関わり方を使い分ける必要があると考えている。

副委員長 ニュータウンへの新住民として地域活動を始められた委員は、旧住民の方と活動を進めていく中で苦勞があったのかどうか伺いたい。

委員 私が住んでいる諏訪永山エリアでは、旧住民と言われる方は、商店街の店主として生活再建の道を選んでいく。ただ次第に大型スーパーの誕生により、個人商店は消えていくという道をたどっている。永山の場合は、自治会が最初から存在するエリアのため、担い手不足により固定化している部分はあるが、しがらみにとらわれない方とうまく連携はできている。エリアについて個人的に感じることは、行政は大きく網をかけていきたいと思っているかもしれないが、地域特性があるため、学区単位で検討している 10 地区よりさらに小さく考えても良いのではないかと。ただ小さすぎると、息苦しさや関係性が見えすぎてしまう懸念がある。マイナス要因を乗り越えてその間をとったバランスの良い単位がどのくらいなのか考えたい。また先ほどのエリアミーティングで生まれたゴミ拾いのミニプロジェクトについて、とても素敵で素晴らしい取組みだが、ゴミ拾いは今までも個人でやっている方を含め、様々な団体で実施してきた。ただ、それは下流のゴミを拾っているに過ぎないため、ゴミに対して根本的な課題を検討するにあたり、上流のゴミを捨てる部分にアプローチできるかは常に課題だと感じている。

副委員長 改めて地域によって特性があり、ニュータウン開発時期にさかのぼる歴史性を感じた。1 地区の中でも状況が違うことは考えていかなければいけないと感じた。

- 委員長 個別に細かく分けても息苦しさがでてくる一方、大きく包み込むと多様性等の細かいところに対応できなくなってしまう。常に多面的に考えていかなければいけない問題である。ただエリアはいずれどこかで線引きして考えなければいけないため、大きくも小さくもない小中学区単位が落としどころとして良いのではないか。また多様な課題があるが、それらも含みながら、一応形として 10 地区に分けて考えている、という部分が後々まで上手に伝わるような制度設計にしていかなければならない。
- 委員 私が住んでいる唐木田は、旧公団の戸建て分譲地と既存地区で 2 分されているようなエリアである。30 年住んでおり、自治会役員を 2 巡した。その中で感じるのは、仲が悪いわけではないが、特に交流がなく、表面的な関係性だけでこれまでやってきた。今やっている活動も仲間は全員新住民である。話はずれるが、近年老人会の活動が活発になってきている。70 代になって引っ越しが困難なため、ここで生きていかなければ、という心境になった方が積極的に動いている印象である。それぞれ得意分野があるため、それを活かし合って新しい活動が立ち上がっている。
- 副委員長 「実は表面的な関係性しかなかった」というコメントが気になった。30 年経過しても、旧住民と新住民の間で表面的なやりとりしかできていない中に、新しい地域の取組みがどのように入っていけば良いのか、考えていかなければいけない。
- 委員長 そういった関わり方を見ていくためにも、モデルエリアとして実験している段階である。地域は根深いため、子どもの頃は新住民・旧住民関係なく関わっていたはずだが、そのうちに違いを感じて段々分かれていくのではないか。
- 副委員長 オブザーバー まだ 30 年経過のため、世代が変わっていないことで、混ざり合っていないのではないか。ニュータウンでは旧住民が圧倒的に少ないため、学区の中で新旧の混ざり合いが少ない。また新住民の 2 世は、感覚的に 8 割近くニュータウンを出ていっている印象がある。合同会社 MichiLab のメンバーは、7 名いる中で内 4 名が多摩市出身者である。そして 4 名の内 1 名が旧住民、残りの 3 名はニュータウン地区の 2 世で成り立っている。親の世代は隔たりがあっても、残ったり戻ってくる 2 世は面白がって参加してくれている。50 年後の混ざり合った状態をつくっていくためにも、いかに面白いことを考え、誘い込んでいくのかを考えていきたい。
- 委員 自分自身も自治会のお誘いが入ったことで、自治会報を改めて見直してみたが、正直わくわくしなかった。それをわくわくできる内容にしていくためにも、若者に楽しみながら関わってもらえるような取組みを行っていく自治会にしていけるのであれば、自分も入りたいと感じた。東寺方では、新しいマンションや施設ができたことで、新しい住民が増えてきている。自治会の歴史を学びながらも、新しい方を誘い込む方法を模索していく必要があるのではないか。誰か一人が責任もってやるだけでなく、出来る人が出来る時に出来るだけやる、というワークシェアの考え方を取り入れていきたい。
- 委員 新住民・旧住民という考え方は、世田谷区にも存在しているのか。
- 副委員長 あるとは思うが、多摩市ほどはっきりはしていない。
- 委員 新住民・旧住民という感覚に寂しさを感じるとともに、早くそのような考え方がなくなる時代が来てほしいと感じた。自分自身、自治会に加入していない中でも何かやりたいという思いや、エリアなどを越えて取り掛かりやすい取組みとして、以前小さい集まりでゴミ

拾いを実施した。先ほど委員から、ゴミを拾うだけではゴミを捨てる人はいなくなる、というような意見があったが、私はゴミを拾う人はゴミを捨てない人だと考えている。実際に私の子どもも、ゴミ拾いを経験した後、スーパーの帰り道でゴミを拾って帰ってきた。そのような小さな動きを少しずつ見える化することで、いずれ社会を変えられる大きなムーブメントにつながるのではないかと感じている。

委員長 続いてテーマ3「中間支援組織の在り方」、テーマ4「地域担当職員の役割」に進みたい。事務局より説明をお願いしたい。

事務局より、資料12、参考資料2に基づき説明

副委員長 専任職員は何名を想定しているのか伺いたい。

事務局 地域協創課のような専門の部署をつくりたいと考えている。まだ検討段階であるが、現状は担当2人で2エリアを担当するようなイメージを持っている。

委員 任期期間はどのくらいを想定しているのか伺いたい。

事務局 市職員の定期異動の一環で配属すると、大体3、4年に1回変わっていくことが想定される。地域担当職員の異動については、全国的にも課題として捉えられている面があるため、考えていきたい。

委員 専任職員は、一日ほとんど現場に出ているイメージなのか。庁内の調整をしているイメージなのか伺いたい。

事務局 基本的には本庁舎に机があるイメージである。ただ2エリア担当しているため、週2回程度は現場に出ていくイメージは持っている。エリア内の施設に巡回して業務にあたるスペースを作れるよう考えている。

委員 何かやりたいことがある人は、その週2回の中で専任職員の方に相談し、エリア内の意見を吸い上げていくイメージなのか。

事務局 基本的には、出来る限り現場に近いところにおいて、地域の人とつながりをつくっていくイメージである。

委員長 体制としてはかなり手厚いのではないか。

事務局 社会福祉協議会では、地域福祉コーディネーターという職務の人が10人くらいいる。そういった役割の人が既にいる中で、市としてどのような立ち位置で関わっていくかは考えていきたい。

委員長 社会福祉協議会との連携方法は具体的に考えたほうが良い。資料についても、社協との連携の取り方をもっとわかりやすい形で示した方が良いのではないか。

委員 コミュニティは、環境（ハード面）に重心を置くのか、人づくり（ソフト面）に重心を置くのか。つまり、行事のイベントを地域担当職員がつくっていくのではなく、それを考える人材をつくっていくという考え方で間違いないか。

事務局 併任職員については、地域を知る研修のような形で新人職員（市職員は市内在住者が3割）を考えている。そのため既に実施しているイベントなどを手伝う想定をしているが、専任職員については、イベントを考えるような人材を育てていく、掘り起こしていくような職務を考えている。

副委員長 社会福祉協議会のコーディネーターは、社会福祉士という資格をもっていて、福祉という面からサポートしていくという役割はわかりやすい。ただこの地域担当職員は、どういっ

- た使命や目的で作られるのかがわかりにくい。併任職員は研修という目的があるためわかりやすいが、専任職員については庁内の連携を取るといった部分が具体的に想像できない。
- 委員長 併任職員と専任職員について、線引きをもっとはっきり引いたほうが良いのではないか。高松市を例にすると、担当職員は若手職員が地域に慣れる研修という位置づけをはっきり行っている。専任職員については、仕組みに関わることを一緒にやっていくとともに、それを進めていく人を育てていく。また何かやるときにはおのずと庁内での調整が必要になってくるため間に入って調整を行う。それが基本的に担当職員と言われる役割の職務である。
- 委員 例えば地域でお祭りをやるとなったときの地域担当職員の役割は何か。
- 委員長 力仕事など、地域の人と一緒に何かやっていくという部分は、併任職員（担当）が行う。専任職員は、どんな企画を立てるか、どこで連携すれば盛り上がるのかをサポートするイメージ。あくまでも地域が主体だが、地域の方が思いつかないようなアイデアの共有や、情報として不足している部分を支援することが専任職員の役割ではないか。
- 委員 お祭りの例はわかりやすいが、自治会加入率を上げていく必要がある、となった場合、担当職員は何をするのか。
- 委員長 「一緒に考える」という役割になるのではないか。多摩市は地域で活動している人が減ってはいるが、激減しているわけではない。そのように活動している人と自治会はまだまだ連携できていない。そこを仲立ちするのが地域担当職員ではないか。他地域の例をひとつ出すと、若い人たちがその土地の名前を勝手に使って活動している、という苦情が自治会からあがった事例があった。せっかく若い人たちが積極的に活動しているとともに、自治会も立派な活動をしている中でもったいない。そこに地域担当職員が入り、上手くマッチングして「つなぐ」という役割をこなしていれば、何か変わったのではないか。地域担当職員は、“多活動マッチング”という考え方の中で、マッチング役として重要な役割を果たすのではないか。
- 副委員長 世田谷だと地区ごとに様々な委員会が存在し、担当係長はそこと接点を持って顔を売り出している。地域の取組みに参加“させてもらう”という形をとると、うまくいかないのではないか。相手方がマッチングを求めている場合はどうするのか。
- 委員長 それはよく見られるパターンである。相手が求めているなければ、入る必要はないのではないか。
- 委員 自分達の解決したい課題に対して、様々な知識がある職員に依頼するなど、地域側が職員を選べるシステムがあれば良いのではないか。
- 委員長 地域によって関わり方が様々で良いのではないか。何から始めて良いかもわからないから最初は担当職員に手伝ってもらいたい、という地域もあれば、全部できるため会議に参加したければしても良いという地域もあって良い。ただそれぞれの地域について情報はある程度持っているべきであるため、担当を置くという考え方が、担当職員制度ではないか。
- 委員 地域担当職員のアウトプットの仕方次第ではないか。単純に広報誌やSNSでエリアの情報発信をしてくれるような職員がいるのも面白いのではないか。それによってライトな層を拾い上げることで、あの人に相談すれば何かできる、と思ってもらえるのではないか。既存のものへのアクセスは大事かもしれないが、無関心層などのライトな層を意識して考

えたほうが面白いのではないか。

- 委員長 それを受け入れる地域は、そもそも地域担当職員を拒否しない。ただ関わり方は様々であり、各エリアのニーズに合わせて広報を支援するなど、地域によって違って良いのではないか。深く関わるのではなく、ここは重点的にやるところと情報を知る程度といった関わり方の濃淡で考えていかなければ“地域担当職員制度”は成り立たないと考えている。研修的な扱いを公募にするのか。若い職員は一律に担当してもらう方向が良いのではないか。
- オブザーバー お祭りを手伝うという関わり方をすると、多くのエリアから要望がでて職員がつぶれてしまうのではないか。個人的には、委員がおっしゃったようなお祭りを周知するという役割を担当職員が担ってくれると、良い制度になるのではないかと考えている。
- 委員長 最初から“手伝います”という書き方をしてしまうと、頼られるだけになってしまうため、“研修として地域の情報を発信します”というPR術などの研修と合わせてやってもらうと、他の部署にいつでも使えるスキルになり良いのではないか。
- 委員 個人的には、市の職員に市民を育ててもらいたいと考えている。またこういったスキルもっている人がいるから一緒にやりましょうとつなげてくれるような役割のほうが良いのではないか。市民も職員も成長する機会になる。研修という考え方だと市民はついてこない。市民も職員も“人づくり”であることがこの議論の中でわかった。
- 副委員長 エリアによって特徴があることや、関わり方は色々あって良いという今までの意見から考えると、各エリアの担当職員同士での情報共有が大切ではないか。関わり方の失敗例成功例などが集まってくると、それこそ地域が求めている情報になるのではないか。例えば報告書をだしていくなど、専任部署内で蓄積をしていくことが必要ではないか。
- 委員長 “地域担当職員制度”の最大メリットが同組織だから情報共有ができるところである。ただいつまでこの制度を続けていくのが気になるところである。

5 その他

- 委員長 続いて、その他に移る。事務局より何かあればお願いしたい。

事務局より、参考資料4について説明

- 事務局 次回は、令和4年8月25日(木)午後6時00分から、本会場で行う。

- 委員長 それでは、第4回の多摩市自治推進委員会をこれで閉会する。

□ 閉会